

回に減らした法人もあった。今後も大型法人が生産増を続けられるかどうかは、外国人技能実習生制度の拡充など労働力対策も鍵となる。

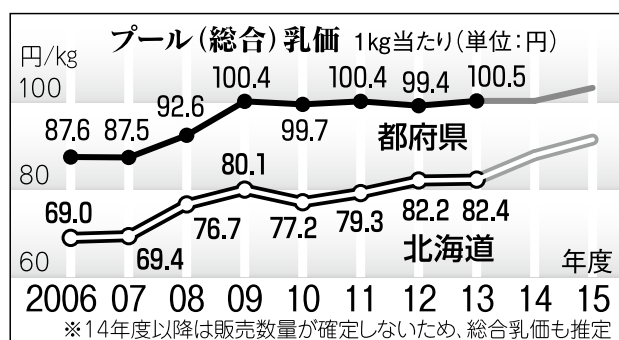
同社の高宮英敏社長は「全道の乳量が落ち込む中で、十勝が日本全体の酪農を引っ張っている」とする。西上加納農場やノバルズデーリーファーム（清水町）な

ど、肉牛生産法人の酪農への参入が十勝で目立っていることについて「性判別精液の普及などで、減っているホルスタイン雄を肉牛農家が確保しようとしている。本州でも肉牛農家がつくった酪農法人が乳量の上位」と分析している。

2015年度乳価 3円60銭上げ 飼料、経費の高騰補えず

2015年1月10日

2015年度乳価が9日に生乳1kg当たり3円60銭引き上げで決着したことについて、十勝の酪農家からは「引き上げは助かる」という声がある一方、バター不足が発生するほどの酪農の危機への対策としては「十分ではない」との見方も多い。



十勝の平均的な規模で経産牛約70頭を飼う芽室町の鈴木進さん（54）は「上がらないよりはよかった。なんとか営農が続けられるが、希望していた5円までは上がらなかった」と話す。

自給飼料の生産が盛んな十勝の酪農でも半分以上を輸入する飼料は、過去最高値の水準が続く。昨年の米国産トウモロコシは豊作だったが、円安で配合飼料は1月から1ト当たり2550円上がった。

鈴木さんの牧場では乳価引き上げで年間200万円以上乳代が上がるが、3年前に比べ飼料代だけで同300万円以上経費が上がっているという。鈴木さんは「(バター不足の要因の)道内の乳量と酪農家戸数の減少に歯止めがかかるには、乳価の引き上げ幅が足りないのでは」とみる。

搾乳牛約750頭を飼養する西上加納農場（士幌町）の加納三司専務（60）も「電気代や人件費など経費上昇を考えると、乳価の値上げだけではカバーし切れない。個々の経営内容にもよるが、中小規模の酪農家には特に厳しいのでは」とみる。

搾乳牛約200頭を飼う元札内農場（中札内村）の福原一斉代表（45）は「値上げはありがたいが、もう2年早ければ。ただ、1月に決まったことで今後の営農計画も立てやすくなる」とし、近年にない早期決定を評価する声も。

加納専務も、「意外に早期に決まったことは評価したいが、額は妥当とは言えない。消費への影響を抜きにして、酪農経営だけ考えるなら本当は10円上げてほしい」と話す。

一方、道内最大規模の酪農法人ドリームヒル（上士幌町）は、年末に締める農家の会計が、「完全に赤字」（小椋幸男社長）だという。

小椋社長（63）は「札幌ではいまだにスーパーにバターが十分行き渡っていないと聞く。ホクレンも、札幌で酪農への理解を深めるイベントなど消費拡大運動をやっているが、商品がないのに拡大運動をしてどうするか。今は厳しい状況の生産者に少しでも資金が回るようにすべきではないのか」と求めている。